

くじら日記

太地町立博物館から



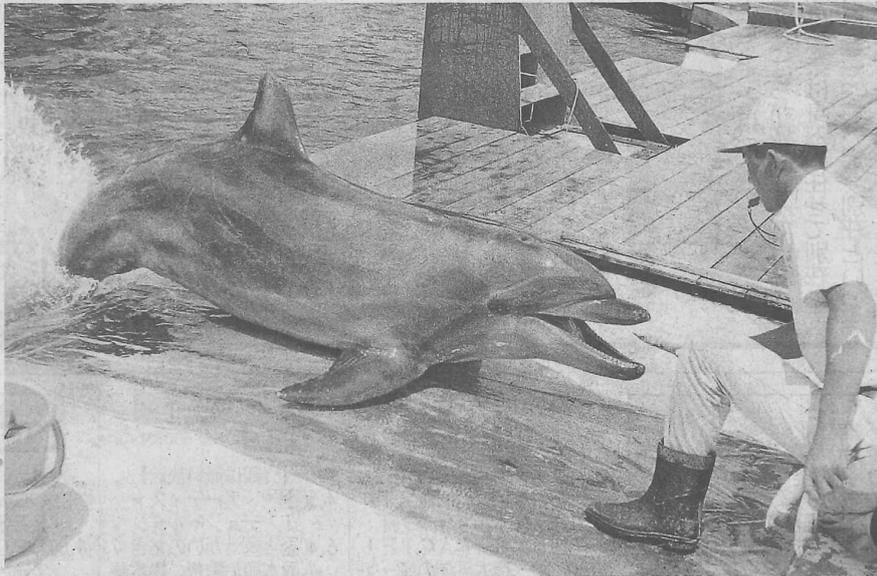
1969（昭和44）年にオープンした太地町立くじらの博物館の発案者であり、当時町長だった故庄司五郎氏の計画には、クジラの「放し飼いのほかに「ショー」がありました。しかし、オープン当初から飼育していたコビレゴンドウは神経質で、調教がうまくいかず、水面から半身が出るジャンプを披露するのが精いっぱいでした。

「ショーにコビレゴンドウは不向き。バンドウイルカが適当」と当時を振り返ったのは、1970（昭和45）年から14年間、くじらの博物館の鯨類飼育を支え、主任も務めた松井進氏です。ただ、コビレゴンドウは追い込み漁で捕獲できましたが、バンドウイルカは過去に一度も追えたことがありませんでした。飼育員らは自ら沖に船を出し、イルカの生け捕り方法を模索しました。

まず、ほかの鯨類を捕食することがあり、恐れられる存在であるシャチの鳴音を使ってみました。鳴音は鯨類が体

から発する音で、イルカの群れを発見すると、録音したシャチの鳴音を水中スピーカーから流しました。するとイルカは慌てた様子で、ねらい通り音とは逆方向に逃げ去ろうとしました。すかさず捕獲のためには港の方角へと誘導を試みましたが、数分後には音への反応がほとんどなくなったといます。「スピーカーを介したことで、本物のシャチの鳴音とは違うことに気付かれたのでは

鯨類飼育の変遷④



飼育員らが自ら沖に出て捕獲し、ショープールに運んだバンドウイルカ＝昭和45年ごろ、太地町

試行錯誤したイルカの捕獲

ないか」と松井氏は推測します。

次に試したのは光でした。2隻の船をロープでつないで、そこにはえ縄のように空き缶の蓋をすらりとぶら下げ、金属の蓋が反射するまばゆい光でイルカを追尾おとしました。ところが、これは全く成果がなかったといいます。たび重なる失敗に、飼育員らは焦ったことでしょう。次に考案されたのが突きん棒と呼ばれる手投げの銚による突き取りでした。捕獲するため銚を使ったことについて松井氏は「苦肉の策だった」と思い起こし、「イルカの傷を最小限に抑えるために矢尻を小さくし、深く刺さらないようにストッパーを取り付けた」と説明します。

松井氏が1971（昭和46）年に鯨類など海獣の飼育者の会で発表した原稿には「熊野灘のバンドウイルカは日の出直後船舶にもっとも接近しやすく、午前7時以降になると殆ど接近しないため出来る限り早く群れを発見することが大切であった」とあります。

原稿では続いて「群れ発見後は全速で群れにむかって進み、イルカの遊泳方向に対し船首が直角になるように操舵（原文ママ）した。群れとの距離100m（び）付近で中速、20m付近で微速にした時、バンドウイルカははじめて方向をかえて船にむかってきた。数頭が水面下約1mの深さで船首を横切ろうとする瞬間に背ヒレ基底下附近を狙って投銚した（銚を投げた）」と記されています。

鯨類飼育の試行錯誤によって、ショープールにバンドウイルカが姿を見せたのは、1970（昭和45）年5月22日のことでした。（太地町立くじらの博物館館長 稲森大樹）

◇ 原則、第1日曜日に掲載します。